

茶路川筋のアイヌ語地名

第1回

白糠町には古くからアイヌの人たちが住み、豊かな自然やその恵みとともに独自の文化を育んできました。その中で最も身近なものが、普段私たちが使っている地名であり、町内にある地名の多くはアイヌ語に由来しています。

今回は、昨年度紹介した「海岸筋」の地名に続き、北海道横断自動車道（道東道）白糠インターチェンジ開通に向けて、「茶路川筋」のアイヌ語地名について、地名の由来やその土地にまつわる話題とともに、茶路川をさかのぼりながら紹介します。

白糠村時代の歌人・郷土史家小

助川濱雄は、著書『釧路国蝦夷時代史』の中で「地名又は山川の名

称は、決して無意味につけられたものではない。天然物の観察に鋭敏な素質をもったアイヌは、つとにこれを観察して、その地方における風物なり、地勢なり、歴史なり、人間の感情なりを含ませて、これを称えた」と記しています。

このように、アイヌ語地名には、土地のようすや生活に必要な情報に加え、古くからその土地で暮らしてきたアイヌの人たちの思いと知恵が込められています。

①キラコタン

「キラコタン」は、西茶路地区にある「キラ（逃げる）・コタン（村）」という意味のアイヌ語地名で、昔、津波が襲来したとき、海岸沿いのマサルカから村をあげて逃げてきたところからその名がつけました。

2006年（平成18年）、釧路地方気象台は、釧路・根室地方のアイヌ語地名をもとに『アイヌ語地名からみた500年間隔地震津波の影響』という調査を実施しました。

調査では、本町のキラコタンの

ほか、鶴居村のキラコタン岬や厚岸町の床潭など7カ所について、文献や現地状況の考察し「地名の由来が確実に津波の影響と考えられたのは、白糠町のキラコタンである」とまとめています。



▲『農業発祥の地碑』左側の石碑には、開拓者11人の名前が記されている

◆『農業発祥の地』

キラコタンは、白糠町の『農業発祥地』でもあります。1985年（昭和60年）に建てられた記念碑には次のように刻まれています。「本町農業は、明治十九年（1886年）谷口峰吉氏による開墾を始祖とされる。氏は農業を目的に福岡県志摩郡藤原村より移住し、キラコタン一番地に入地、大木蒙した未開の地に鋤を下した。

その後農業は、明治三十年、殖民地区画の測設と、入植により、



▲旧国鉄白糠線跡とカリシヨ川の交点を、今も残る鉄道橋から撮影

ちなみに永田方正は『北海道蝦夷語地名解』で「曲磯？」と記し、

1950年（昭和25年）に発刊された旧『白糠町史』には「？狩所ではないかと思われる」とあります。どちらも「？」がつけられているくらいですから、解釈しきれなかったようです。その点で、貫塩工カシの解釈は、言葉はもちろん、アイヌ民族の生活や現地のようすを知り尽くした工カシだからこそできたものと言えます。

◆加里庶炭鉱

「加里庶炭鉱」は1914年（大正3年）に開かれた炭鉱で、第一

次世界大戦末期の1919年（大正8年）、開北炭鉱株式会社が買収してからは、白糠駅まで専用線を敷いて根室本線への引込線を設けるなど、戦争景気の中、白糠炭田の最盛期を象徴する存在でした。終戦後の不況で閉山が相次ぐなかでも一定の出炭量を確保していました。1938年（昭和13年）に閉山しました。

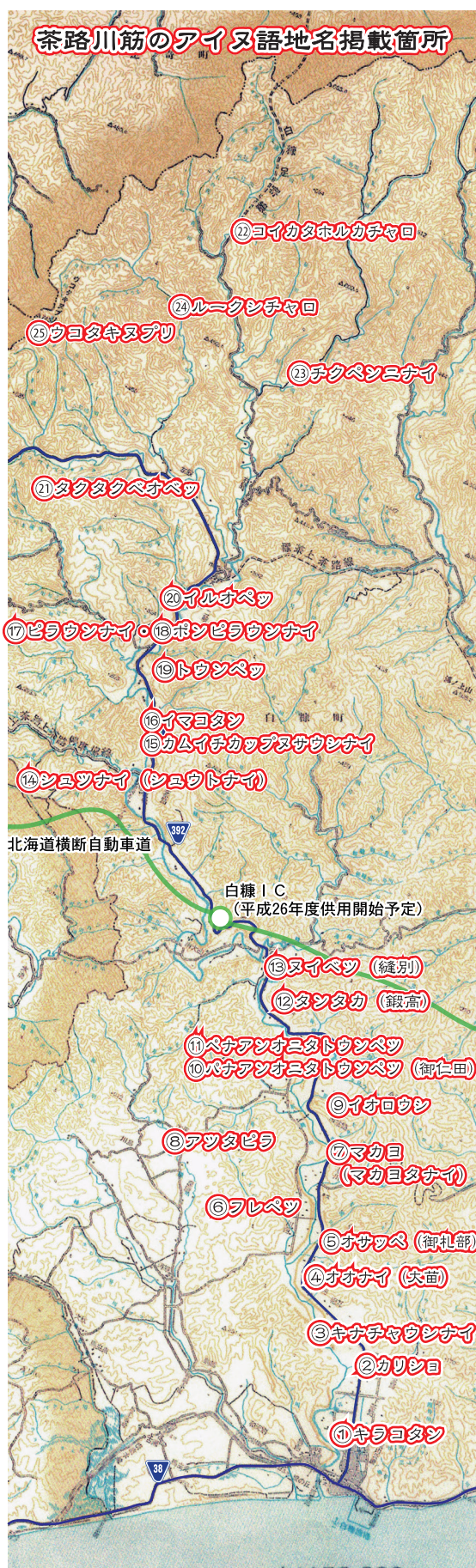
太平洋戦争後の1957年（昭和32年）釧路埠頭株式会社によって再び開坑しましたが、2年間で閉鎖されています。

【参考文献】叢書しらぬか第5巻『白糠炭田に灯は消えず』

■茶路川筋のアイヌ語地名

- ① キラコタン
- ② カリシヨ
- ③ キナチャウシナイ
- ④ オオナイ（大苗）
- ⑤ オサツペ（御礼部）
- ⑥ フレベツ
- ⑦ マカヨ（マカヨタナイ）
- ⑧ アツタピラ
- ⑨ イオロウシ
- ⑩ パナアンオニタトウンベツ
- ⑪ ペナアンオニタトウンベツ（御仁田）
- ⑫ タンタカ（鍛高）
- ⑬ スイベツ（縫別）
- ⑭ シュツナイ（シュウトナイ）
- ⑮ カムイチカップヌサウシナイ
- ⑯ イマコタン
- ⑰ ピラウンナイ
- ⑱ ポンピラウンナイ
- ⑳ イルオベツ
- ㉑ タクタクベオベツ
- ㉒ コイカタホルカチャロ
- ㉓ チクペンニナイ
- ㉔ ルークシチャロ
- ㉕ ウコタキヌプリ

『茶路川筋のアイヌ語地名』25カ所を、今から順に紹介します。また、場所については、左の図面を参照してください。



茶路川筋のアイヌ語地名掲載箇所

茶路川筋の アイヌ語地名

第2回

○キナチャウシナイ

「キナチャウシナイ」は、白糠市街から真つすぐに北上する国道392号が、左にカーブする相互の大曲の東側にあります。

「キナ(ガマ・蒲)・チャ(刈る)・ウシ(いつもする)・イ(ところの)・ナイ(沢)」という意味で、ごぎを編むキナをいつも刈り取ったところからその名がつけました。

キナ(ガマ・蒲)は、池や沼、湿原などの水辺に生える多年草で、高さは1・5mから2mになり、雌花が熟すと褐色の穂になります。「シキナ」とも言いますが、釧路地方では「キナ」で、これで作ったごぎも「キナ」と呼びます。

■『ししゃも(柳葉魚)伝説』

昔、キナチャウシナイから流れる川のほとりに、柳の木が茂るス



キナチャウシナイから流れる川

スウシナイというところがあった、柳夫妻が住んでいた。家は、柳で建て、屋根をキナでふいたそれは大きなものだった。

あるとき、ものがとれない悪い年があつて、コタンは餓死寸前となり、人々は柳夫妻のところに集まって神に祈った。柳夫妻が祈っ

ていると、にわかには大粒の雨が降ってきた。川辺の柳の葉は雨にたかべながら流れていった。

やがて雨が止み、あたりが静かになると、老夫婦の耳に「ピチャツ、ピチャツ」という音が聞こえてきた。水面を見ると、流れに逆らつて川をのぼる柳の葉の下に真つ黒に群がる小魚がいて、跳ねる姿が目に入った。老夫婦は思わず「スス(柳)・ハム(葉)・チェプ(魚)」と叫んだ。

この「スス・ハム・チェプ」が、コタンの人々を飢えから救つた。「貫塩喜蔵氏、礼木宅四郎氏の話 参考 『白糠のアイヌ語地名』 (白糠地名研究会)」

○オオナイ(大苗)

キナチャウシナイから国道を本別町方向へ進むと、しばらく直線が続き、やがて右に大きくカーブします。このあたりが「オオナイ」で、「オオ(深い)・ナイ(沢)」という意味です。漢字では「大苗」と書き、町内会の名前となつています。その名のとおり、カーブ手前の山側には深い沢があり、大苗川が茶路川へと流れています。

■文豪徳富蘆花の旅日記「茶路」

1910年(明治43年)9月24日、明治大正期の小説家徳富蘆花が、茶路に住むという知人に会うため白糠を訪れました。著作『みみずのたはこと』付録「旅の日記」の「茶路」には、白糠駅に降り立ち、案内の男とともに茶路へ向かい、途中ひと休みした家で、知人が釧路にいることを聞き、白糠へ引き返した道中が記されています。

その中に「二里も来たかと思ふ頃、路は殆んど直角に右へ折れて居る。最早茶路の入口だ。」とあり、地図で追うと、そこは大苗の右カーブと考えられます。

文豪徳富の旅日記には、オオナイまでの初秋の風景と人々との出会いが、文学の香り高く描かれています。



国道392号、大苗の右カーブ

茶路川筋の アイヌ語地名

第3回

○オサツペ（御札部）

「オサツペ」は、国道392号沿いにある信光寺の裏手を流れる川の名前で、町内会名にもなっています。

「オ（川尻が）・サツ（かれている・乾く）・ペ（ところ）」という意味で、川の水が川底の下にもぐって伏流水となるため、川尻では水が見えないところからその名がつけました。



真光橋とオサツペ川

年（明治31年）、茶路の土地の貸付願を出し、炭鉱経営から撤退する1902年（明治35年）ころま

り、山田秀三の『北海道の地名』では、弟子屈町と函館市南茅部の「尾札部」が紹介されています。

■炭鉱経営者が農場経営？

尾関一男氏の『茶路開拓史 明治から大正にかけて』には、明治30年代に、二人の炭鉱経営者が茶路で、北海道国有未開地処分法に基づき土地の貸し付けを受けていたことが記されています。

安政年間に幕府が開いた炭山の閉山から33年後の1897年（明治30年）6月、東京の肥田照作が刺牛地区に炭鉱を開き、まもなくその隣で函館の磯部榮基が採炭を始め、白糠に再び炭山の灯がともりました。

そしてこの二人は、翌1898年（明治31年）、茶路の土地の貸付願を出し、炭鉱経営から撤退する1902年（明治35年）ころま

で、肥田が今の相互のあたりに35町2畝（約35診）、磯部がオサツペに41町9反余り（約42診）の貸し付けを受けていました。

このことについて尾関氏は、御札部沢、大苗沢には石炭が埋蔵されていて、すでに試掘が行われていたことから、新鉱開発のもくろみとともに「炭鉱の住居と鉱員や家族が自給の耕作をすることも含めての土地」であったと分析しています。

○フレペツ（川）

「フレペツ川」は、茶路川西岸にある川西共栄地区の沢から出てしばらく南下し、大苗で茶路川に注いでいます。

「フレ（赤い）・ペツ（川）」という意味で、川底の沈殿物によって川が赤く見えたことから、そう呼ばれました。

「赤い川」のもとになっている沈殿物は、川の水に含まれている鉄分が細菌によって酸化され、細菌が死んで残った酸化鉄が川底にたまったもので、鉄が錆びた色（赤茶色）をしています。

同じ意味の地名に「フレナイ」があり、町内でも庶路川や和天別川の支流にあるほか、全道のいたるところにあります。



フレペツ川

■「赤い川」の伝説

「赤い川」にまつわるアイヌ伝説として「パシクル伝説」の中に次のような話があります。

昔厚岸のアイヌが舟で攻めて来たことがあった。この戦いは白糠アイヌが不利になり、この沼地のところで多くの人が戦死し、その死体にカラスがたくさん集まって騒いでいたのでパシクルと名付けたという。さらに音別へ寄ったところフレナイ（赤い川）という小川がある。この川はその戦いとき、白糠の首長が厚岸アイヌの毒矢にあたって倒れ、その血が真つ赤に川を流れるのを海から見ている厚岸アイヌが、フレナイと名付けたという。
（貫塩喜蔵エカシの話／『アイヌ伝説集』（更科源蔵）から引用）

茶路川筋の アイヌ語地名

第4回

○マカヨ(川)

「マカヨ」は、茶路小中学校の北側を流れるマカヨ川に由来するアイヌ語地名です。「マカヨ(フキノトウ)・タ(刈る)・ナイ(沢)」という意味があり、春になるとフキノトウで埋め尽くされ、それを刈り取る場所であることを示しています。

ちなみに、マカヨ1番地にある茶路小中学校では、毎年度の学校経営計画を『マカヨの教育』と名付け、地域とのつながりを大切に示した教育活動を展開しています。



松川橋とマカヨ川

■アイヌ民族とフキ

フキノトウはフキの花茎で、早春に出てきて花を咲かせ、その後あの大きな葉が伸びてきます。フキノトウも葉の茎も、春を代表する山菜としてよく食べられています。アイヌ民族も古くから食用薬用として利用してきました。アイヌ語で葉のフキのことを「コロコニ」と言います。

食用にしたのはフキノトウの茎と葉の茎で、焼いて皮をむき汁の具にしました。また、葉の茎は漬物にしたり、乾燥させて冬場の食糧にしていました。

薬用としては、ケガをしたとき茎を生のまま噛んで傷につけたり、風邪には茎を煎じて飲んだようです。根も煎じて熱さましや解毒に使いました。麻しん(はしか)にも効いたと言われています。

(参考『アイヌ民族の有用植物』北海道立衛生研究所、『平取町内

に伝わる薬用植物』貝澤美和子)

○アツタピラ

「アツタピラ」は、茶路川が茶路橋を過ぎたところで左に反れ、松川地区の西側を回り込むように大きくカーブしているところにある崖の名前です。

「アツ(オヒヨウの樹皮)・タ(切る)・ピラ(崖)」という意味で、アイヌ民族伝統の衣服の材料となるオヒヨウの木が生えている崖のことを言います。

オヒヨウは、北海道に多く見られるニレ科の落葉樹です。高さ25m、太さ1mにもなり、現在では主に家具材として使われています。さて、厚岸町の「アツケシ」も

「アツ(オヒヨウの樹皮)・ケ(はがす)・ウシ(いつもする)・イ(所)」に由来するという説があります。

言語学者の知里真志保博士は著書の中で、オヒヨウの皮採りにちなんだ地名が北海道に多くあるのは、アイヌ生活における重要な行事の一つであったからで、皮採りのときには、木の神に酒や幣(イナウ)を捧げ、木を裸にしないという意味で、皮の半分は残しておくこと述べています。(参考『分類アイヌ語辞典 植物編』)

■樹皮衣「アットウシ」

アイヌ民族の伝統的な衣服は、身近な材料を使って作られています。

材料別には、獣の皮を使った「獣皮衣」、植物の繊維を用いた「植物衣」、木綿を材料にした「木綿衣」に分けられ、植物衣の中でも樹木の皮を使って作られる「樹皮衣」は、木綿衣とともにアイヌ民族の代表的な衣服とされています。



アットウシ

樹皮衣は「アットウシ」と呼ばれ、オヒヨウの樹皮の内側の皮(内皮)からとった繊維を糸にし、それを織った布で仕立てられます。特にオヒヨウの内皮は、柔らかく丈夫であることから適していたようです。

(参考「アイヌの歴史と文化II 『アイヌの衣服』(兒玉マリ)」創堂舎)

茶路川筋の アイヌ語地名

第5回

○御仁田(おにた)

国道392号を北上し、中茶路にある簡易郵便局を過ぎたところで、茶路川にかかっている協和橋を渡ると「御仁田」に入ります。

「御仁田」は、「パナアンオニタトウンペツ」という川の名前に由来し、その意味は、「パナ(川下)・アン(ある)・オ(川尻)・ニタイ(森林)・ト(沼)・ウン(ある)・ペツ(川)」で、「川下にある川尻に森林と沼がある川」と訳されます。

■「パナ」と「ペナ」

「パナ」があれば「ペナ」があると言われるとおり、アイヌ語地名には、対になっているものがあります。御仁田のもとになった「パナアンオニタトウンペツ」も少し北側に「ペナアンオニタトウンペツ」という川があり対になっています。



望郷橋とペナアンオニタトウンペツ川

川下を意味する「パナ」に対し、「ペナ」は川上のことを言い、どちらの川も茶路川に注いでいることから、茶路川の川下側に川尻があるのが「パナ」、川上の方に川尻があるのが「ペナ」と名前がつけられました。

このほかにも、『白糠のアイヌ語地名』では、「パナ」「ペナ」がついた次のような地名が紹介されています。

「パナアンルペシペ」と「ペナア

ンルペシペ」(川下・川上にある道が山を越えて向こう側の土地へ降りていつている)

「パナアンルーチシポク」(川下にある峠の下(上り口))と「ペナアンルーチシポク」(川上にある峠の下(下り))

「パナアンソーポコマナイ」と「ペナアンソーポコマナイ」(川下・川上にある滝下川のあるところ)

○イオロウシ

「イオロウシ」は、国道392号が協和橋の辺りで崖を迂回するようにカーブしているところを指し、川の名前にもなっています。

「エ(頭)・ウオロ(水についている)・ウシ(ところ)」に由来していて、山がせり出し、その先端が川にせまっているようすを表します。「イオロウシ川」は、そのせり出した山を回り込むように高台の手前を流れ、茶路川に注いでいます。

■ガンケと氷坂

尾関一男氏は『茶路開拓史』の中で、松川から高台への道(旧道)について次のように記しています。

高台へいく崖(ガンケといっ

いた)の手前で、御仁田に分かれる道がある…(略)。

高台への道は、崖を開いて人や馬がおれるだけの道をつくり、山の裾をまわっていて、イオロウシ川を渡って進み、急坂を斜め右に登る…旧三郷神社前をとりセタラナイ川にでる。

ただ、大正十三年の地図には、国道392号線と同じく、氷坂(通称)をとめる道がしめされているが、このような道があったのかもしれない。

ここに出てくる通称の「ガンケ」は、イオロウシの先端の崖を示し、「氷坂」は、現国道の高台から北側へ下りる日陰の坂を指しています。このような通称もその場所のようすや情報を端的に伝える地域ならではの地名として大切にしたいものです。



ガンケ (協和橋付近から撮影)

茶路川筋の アイヌ語地名

第6回

○タンタカ（鍛高）

「タンタカ」は、白糠市街から国道392号を16kmほど北上したところにある、その名はしそ焼酎「鍛高譚」によって全国的に知られています。



鍛高山としそ畑

「タンタカ」とは、魚のカレイ（鰈）を意味し、カレイがこまでさかのぼったという伝説から地名になったと言われています。白糠村時代の郷土史家小助川濱雄は、

『釧路国蝦夷時代史』で「川の名にしてタンタカと称する鰈の一種ここ迄上りたるより名あり」と記し、旧『白糠町史』（渡辺茂編）の「アイヌ語地名解」では、「タカノハ鰈、昔タカノハ鰈がこまで遡つたという」と説明しています。

現在では、タンタカはマツカワを指しますが、言語学者の知里真志保博士は『分類アイヌ語辞典動物編』で、白糠ではカレイ類の成魚の総称もタンタカであったとしています。

■高級魚タンタカ

タンタカ（マツカワ）は、主に北海道太平洋沿岸の水深200mより浅い砂泥底に生息しています。ヒラメに次ぐ高級魚として知られ、えりも町から函館市南茅部までの海で獲れるものには「玉鰈」というブランド名がつけられています。

マツカワの名は、目がある側の皮が松の表面に似ていることからついたもので、ひれが鷹の羽の模様に見えるのでタカノハとも呼ばれています。

一時は漁獲量が減って幻の魚と言われることが多かったが、近ごろでは稚魚の放流によって水揚げが増えてきているとのこと。

（参考 北海道ホームページ「北海道お魚図鑑」）



タンタカ（白糠漁協提供）

○ヌイベツ（縫別）

来る3月29日「ヌイベツ」で工事が進んでいる道東自動車道白糠インターチェンジが開通します。

「ヌイベツ」は「ヌイ（豊漁・たくさんある）・ペツ（川）」という意味で、秋になると産卵のために茶路川をさかのぼるサケで、川がいつぱいになったところからその名がつけられました。古くは「ノイベツ」と呼ばれ、その名は現在も字名として使われています。

■地層が物語る縫別の大昔

縫別川上流の約3500万年前の地層では「褶曲」と呼ばれる曲がった地層や石炭層を見ることができません。また、植物化石をはじめ、カキや巻貝、カニの爪などの化石も見つかっています。

褶曲は南大曲の茶路川の崖にもあり、約4000万年前の砂岩と泥岩からなる地層がグニャツと曲がっているようすが見られます。

この地層の変形は、海底での地滑りによってできたものと考えられていて、海の生物の化石とあわせ、大昔、このあたりは海の底であったことを物語っています。

（参考 平成25年度「ふるさと未来塾」活動資料（北海道教育大学釧路校授業開発研究室提供））



南大曲の褶曲

茶路川筋の アイヌ語地名

第7回

○シュツナイ(シユウトナイ)

「シュツナイ」は、上茶路で茶路川に注いでいる川の名前で、「シユツスツ(ふもと)・ナイ(沢)」という意味があり、山のふもとにある沢のことを表しています。この沢を7^{キリ}ほど奥へ行ったところには、白糠炭田最後のヤマ・上茶路炭鉱(1964年(昭和39年)開坑、1970年(昭和45年)閉山)がありました。



シュツナイ川と茶路川の交点

■「スツ」と「シツ」

この地名について、旧『白糠町史』は「老母が死んで葬った沢」と訳しています。これは「スツ」を「老母」と解釈したことによるもので、白糠地名研究会は「バチエラー辞典では『老母』とあるので、(町史の)地名解はこれをとったのであろう」と述べています。調べてみると、知里真志保博士や萱野茂氏の辞書でも「スツ」は「祖母」、「先祖」と載っています。

白糠地名研究会は「スツ」について、その地形から、刺牛地区にある「シツナイ」(シツ(尾根)・ナイ(沢)に通じるもの)として、「シツナイは、山と山にはさまれた狭い沢のことを言う。これをスツナイと解してもふもとの沢となる」と説明しています。同じ山あいの沢を表す地名でも、山の下を意味する「スツ」と山の

上を意味する「シツ」を使った言い方があるというわけです。

ちなみに、後志管内の留寿都(ル・スツ)村も「スツ」を「ふもと」として「道が山のふもとにある」と訳しています。

(参考)『知里真志保著作集 別巻Ⅱ分類アイヌ語辞典 人間編』、『萱野茂のアイヌ語辞典』)

○カムイチカプヌサウシナイ

「カムイチカプヌサウシナイ」は、国道392号からシュツナイへ向かう道道が分岐しているところの少し北のあたりと言われています。明確な位置は不明ですが「カムイ(神)・チカプ(鳥)・ヌサ(祭壇)・ウシ(いづもある)・ナイ(沢)」という意味から、アイヌの人たちが神に祈りをささげる大切な場所であったことがわかります。

フクロウをはじめ、ワシやタカは、カムイチカプ(神の鳥)であり、中でも最高位のシマフクロウは「コタンコロカムイ(村を司る神)」としてアイヌの人たちに敬われています。

○イマコタン

カムイチカプヌサウシナイの少し北に「イマコタン」がありま

す。「イマニツ(魚焼串)・コタン(村)」から、川をのぼる魚を焼いて食べた村と訳されています。

この場所は、縄文時代晩期から続縄文時代初頭(およそ3000年前から2500年前まで)の「上茶路遺跡」とほぼ同じところにあり、2006年(平成18年)に行われた発掘調査では、住居跡は発見されませんでした。緑ヶ岡式土器や石器のほか、76か所にもおよぶ焼土(たき火跡)が確認され、焼けたシカの骨が多く出土しています。

縄文の人たちがシカを焼いたたき火跡の上に、アイヌの人たちが魚を焼いて食べた村があったというのは、偶然とは思えない歴史のつながりを感じます。



発掘調査の出土品(公民館図書室の展示ケース)

茶路川筋の アイヌ語地名

第8回

○ピラウンナイ(川)

国道392号を北上し、上茶路の石井牧場を過ぎた所から続く坂を下って右へカーブすると、茶路川は大きく左へ曲がっていきます。その先で茶路川に流れ込んでいる川が「ピラウンナイ川」です。「ピラ(崖)・ウン(ある)・ナイ(沢)」のとおり、川に沿って崖が続いているところから、その名が付けました。

○ポンピラウンナイ(川)

「ポンピラウンナイ川」は、ピラウンナイ川に流れる川で、「ポン(小さい)」という言葉から「小さなピラウンナイ」と訳されますが、崖は大規模なものが見られるとのこと。ここで「ポン」が表しているのは、「ピラ」ではなくピラウンナイという川のこと、この川が支流であることを意味しています。



道東林道とタウンペツ川の交点

○タウンペツ(川)

「タウンペツ」は、ピラウンナイからさらに茶路川を北上し、美恵橋の手前で北西の方向から注いでいます。通称「トンベの沢」と呼ばれています。

「ト(沼)、ウン(ある)、ペツ(川)」という意味ですが、今は、沼もその痕跡も見つけることはできません。

●トンベ遺跡

美恵橋の付近は、大正時代に刀や動物の骨が出土し、住居跡のようなくぼみがあったという話から「トンベ遺跡」として登録されています。

遺跡は、アイヌ時代のものと考えられ、かつて「トンベ骨塚」と呼ばれていました。昭和40年代に町内の遺跡調査に携わった富水慶一氏は「鹿の骨塚を形成していた」というと記録しています。

シカの骨塚については、胆振管内厚真町での発掘調査で、意図的に置かれたたぐさんのシカの骨が見つかっており、アイヌ民族の送り儀礼として、熊送りの「イヨマシテ」のように、シカも送りの対象になっていたことがわかりました。ただ、「トンベ遺跡」がそうであったかは、確認することができません。

(参考)北海道博物館協会ホームページ『集まれ!北海道の学芸員』)

●「ナイ」と「ペツ」

一般的には「ナイ」は「沢」、「ペツ」は「川」と訳しますが、「ナイ」を「小さな川」「流れが穏やかな洪水をあまり起こさない川」、「ペツ」を「大きな川」

「魚の豊富な川」「洪水をよく起こす川」と訳している文献もあります。

アイヌ語地名研究家の山田秀三は、北海道のアイヌ語地名の約三分の一が「ペツ」と「ナイ」のつく地名だとして「アイヌ時代には、川は、大切な食糧である魚を獲る場所だった。また海に出るのにも、山に狩猟に行くのにも、あるいは植物食糧の山菜を採集に行くのにも川が利用された。川が、食べていくための最も大切な処であったから、それが地名に多く使われていたのであろう。」と述べています。

(参考)『アイヌ語地名の研究 第一巻』)



茶路川筋のアイヌ語地名

第9回

○イルオベツ

「イルオベツ」は、国道392号が二股へと上って行く坂の途中、左側に見える川の名前です。地図では「イロベツ川」と記されています。

「イ(熊)・ル(足あと)・オ(ある)・ベツ(川)」と言う意味で、白糠地名研究会は「熊の足跡の見られる川」としています。また、明治時代のアイヌ語研究者永田方正も『北海道蝦夷語地名解』で「熊路ノ川」と訳し、「ア

イヌ云 神居ル處ナリト 神八則チ 熊ヲ云フ」と説明しています。

○コイカタホルカチャロ(川)

「コイカタホルカチャロ川」は、「コイカ(東)・タ(で)・ホルカ(逆さ・反対)・チャロベツ(茶路川)」という意味があり、「東方にあつて逆流する茶路川」と訳されています。

白糠地名研究会は、この川は「二股から右股を経て、まっすぐ北にむかつてのびる茶路川の本

流」のことを言い「右股あたりで大きくホルカしている」と述べています。

「ホルカ」については、川がUターンするように後戻りしていることを表す場合と、支流が方向を変えている場合とがあるようですが、地名研究会は「北にむかうと思えば途中で南下し、再び方向を転じて北にむかうというように逆もどりすることをいう」と、川の蛇行を説明しています。

確かに地図を見ると、茶路川は右股でかなり蛇行していますので、その様子から「ホルカ」という名が付いたのだと思います。

○ルークシチャロ(川)

「ルークシチャロ川」は、二股の西の方から茶路川に流れている川です。「ル(道)・クシ(通る)・チャロ(茶路川)」という意味があり「茶路川に沿って道が通じている」と訳されています。

以前、海岸筋のアイヌ語地名の中で、茶路川には古くから十勝の内陸や網走へ通じる交通路の役割があつたことから、その道の入口である川口を意味する「チャロ」という名が付いたことを紹介しました。その延長がこの「ルークシチャロ」と言うことです。

●海と山のシラリカを結ぶ道
ルークシチャロ川の道を山越えすると足寄町に入ります。

足寄町(郡)は、昭和23年に十勝支庁の所属となるまでは、松前藩時代はクスリ場所、明治時代以降は釧路国、釧路支庁に属していました。

アイヌ語地名研究家の山田秀三は『北海道のアイヌ語地名』で、「足寄郡が釧路国の中に入れられていたのは、そこが釧路アイヌの居住地であつたからで、白糠系の人たちの住地だつたらしい」と記しています。このことから、茶路川は、海と山のシラリカコタンをつなぐ大切な道であつたことがわかります。



ルークシチャロ川

茶路川筋の アイヌ語地名

第10回
(最終回)

○タクタクベオベツ(川)

「タクタクベオベツ川」は、左股から本別町に向かう国道392号に沿って流れている川で、「タク・タク(ごろごろした石)・ベ(あるもの)・オ(そこに)・ベツ(川)」と言う意味があります。

アイヌ語の「タク」はもともと「玉、かたまり」という意味で、

それを「タク・タク」と重ねていること、また、この川が険しい山岳地帯から流れていることから、大きな石がごろごろと無数にあるようすを知ることができます。

このことは、明治時代のアイヌ語研究者永田方正も『北海道蝦夷語地名解』で「大石多キ川、安政帳二大川ノ内大石アル処トアル」と記載しています。



○チクペンニナイ

「チクペンニナイ」は、茶路川が右股から3キロほど北上したところで分かれている川で、「チクペンニ(チクベニ/えんじゆの木)・ナイ(沢)」と言う意味から、「えんじゆの木が生えている沢」と訳されます。

●エンジュ(イヌエンジュ/犬槐・犬延寿)

エンジュは、心材の濃い褐色と心材を取り囲んだ部分の淡い黄白色のコントラストや光沢のある木目を生かし、床柱、家具、盆、クラフト、フローリングのほか、三味線や太鼓の胴にも使われます。北海道では、腐りにくさから鉄道の枕木にも使いました。

また、幹や枝を傷つけると臭いが出るので、昔、アイヌの人たちは、その臭いが病魔を寄せ付けないとして、チセ(家)の骨組みに用いていたとのことでした。

(参考)北海道総合研究機構林産試験場ホームページ「道産木材データベース」

○ウコタキヌプリ

「ウコタキヌプリ」は、ルークシチャロ川の流れ、白糠町と本別町

と足寄町の境にある山で、標高は745メートル。白糠の山のなかでは、阿寒富士(1476メートル)に次いで2番目に高い山です。

「ウコツ(互にくつついて)・キ(する)・ヌプリ(山)」と言う意味で、二つの山が互いに抱き合っているような姿をしていることから名前がつけました。

この山は「ユクランヌプリ(ユク(鹿)・ラン(下りる)・ヌプリ(山))」とも呼ばれ、昔、鹿をつかさどる神様が天から鹿を下ろしたところと言う伝説が残っています。

●イナウシペ

『白糠のアイヌ語地名』には、ウコタキヌプリに関係した地名として「イナウシペ」が紹介されています。

「イナウシペ(イナウ(木幣)・ウシ(ある)・ペ(ところ))」は、ウコタキヌプリに連なる山並みを約2キロほど北上したところにあり(イナウシ山)、山へ狩りに行くとき、ウコタキヌプリに安全と収穫を祈ってイナウを捧げたところと言われています。